

[A年] 公現後第1主日(2025年1月12日)

【旧約聖書日課】サムエル記上 16章1~13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」²サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、³いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」⁴サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」⁵「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食に一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。⁶彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油が注がれる者だ、と思った。⁷しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」⁸エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」⁹エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」¹⁰エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」¹¹サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」¹²「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」¹³エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」¹⁴サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章12~23節

¹²従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。¹³また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。¹⁴なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。

¹⁵では、どうなのか。わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということでしょうか。決してそうではない。¹⁶知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。¹⁷しかし、神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、¹⁸罪から解放され、義に仕えるようになりました。¹⁹あなたがたの肉の弱さを考慮して、分かりやすく説明しているのです。かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい。²⁰あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。²¹では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。²²あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。²³罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章13~17節

¹³そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。¹⁴ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」¹⁵しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。¹⁶イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。¹⁷そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上 16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことで悲しんでいるのか。私はイスラエルの王位から彼を退けた。角に油を満たし、出かせなさい。あなたをベツレヘム人エッサイのもとに遣わす。私は彼の息子の中に、王となる者を見つけた。」2サムエルは言った。「どうして、私が行きましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえを献げるために来た』と言いなさい。3いけにえを献げるときには、エッサイを招きなさい。あなたがなすべきことは、その時に私が教える。あなたは、私がそれと告げる者に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老たちは不安そうに出迎えて言った。「お出でになったのは、平和なことのためですか。」5サムエルは言った。「平和なことです。主にいけにえを献げるために来ました。身を清めて、私と一緒にいけにえの儀式に出てください。」こうして、サムエルはエッサイとその息子たちを清め、いけにえを献げるために彼らを招いた。

6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だと思った。7しかし、主はサムエルに言った。「容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映ることを見るが、私は心を見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」9エッサイは次にジャンマを通らせたが、サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子をサムエルの前に通してみたが、サムエルはエッサイに言った。「主はこれらのうち、誰をもお選びにならない。」11サムエルはエッサイに言った。「あなたの息子はこれだけですか。」エッサイは言った。「末の子がまだ残っていますが、羊の群れの番をしています。」サムエルは、エッサイに言った。「人をやって、彼を連れて来ててください。彼が来るまでは、私たちは食卓には着きません。」12エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。彼がその人である。」13サムエルは油の入った角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

ローマの信徒への手紙 6章12～23節

12ですから、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。13また、あなたがたの五体を不義のための道具〔直訳→武器〕として罪に献げてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生かされた者として神に献げ、自分の五体を義のための道具として神に献げなさい。14罪があなたがたを支配することはありません。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるからです。

15では、どうなのか。私たちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯そう、ということになるのでしょうか。決してそうではない。16知らないのですか。あなたがたは、誰かに奴隷として従えば、その人の奴隷となる。つまり、罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従う奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。17しかし、神に感謝すべきことに、あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準〔直訳→型〕に心から聞き従って、18罪から自由にされ、義の奴隷となったのです。

19あなたがたの肉の弱さを考慮して、私は分かりやすい物言いをしています。かつて、五体を汚れと不法の奴隷として献げて不法に陥ったように、今は、五体を義の奴隷として献げて聖なる者となりなさい。20あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身〔別訳→縁のない者〕でした。21では、その時、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥とするものです。その行き着くところは死です。22しかし、今や罪から自由にされて神の奴隷となり、聖なる者となるための実を結んでいます。その行き着くところは永遠の命です。23罪の支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠の命なのです。

マタイによる福音書 3章13～17節

13その時、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。14ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところに来られたのですか。」15しかし、イエスはお答えになった。「今は、そうさせてもらいたい。すべてを正しく行う〔直訳→すべての義を満たす〕のは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。16イエスは洗礼を受けると、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのを御覧になった。17そして、「これは私の愛する子、私の心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月12日「公現後第1主日」の日課主題は「イエスの洗礼」。「主の洗礼」の記念は、西方教会では伝統的に「公現日」に続く主日に設定されてきたが、東方教会では「公現日」に行われるものとされてきた。

・旧約聖書日課は、「サムエル記上」より、預言者サムエルがダビデに油注ぎをしたことを伝える説話箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」より、主と結ばれる洗礼にあずかった者にとっての罪の問題を説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」より、主イエスの洗礼を伝える説話箇所。

旧約日課(サムエル上 16章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第三部を構成する歴史物語文書。「前の預言者」は、「モーセ」によって「律法」を授与された「イスラエル」が「ヨシュア」に導かれてカナン地方に定住した時代から、イスラエルおよびユダの両王国が滅亡するまでの時代を、後の「ユダヤ宗教共同体」形成(ペルシア支配時代)に携わった人々の視点に基づいて物語った「イスラエル正史物語」と位置づけられる。第四部を構成する「列王記」には、相当程度の史実性が認められているが、「ヨシュア記」、「士師記」、「サムエル記」については外部史料による検証が困難であると共に、ほぼ伝承物語の集成という体裁で編纂されており、大部分がオリエント世界で広く知られる「王国年代誌」の体裁で編纂されている「列王記」とは異質である。「サムエル記」は、イスラエルおよびユダの両王国のそれぞれのルーツに関する「サウル伝承」と「ダビデ伝承」を一体的な物語に再編集した文書であり、後の「ユダヤ宗教共同体」形成(ペルシア支配時代)における「大イスラエル主義」(先に滅亡したイスラエル王国の王権は、元来ルーツを共有するユダ王国によって継承された、という思想)を補強するものとなっている。しかし、本書においては、サウルの王国が「イスラエル」と呼ばれるのに対して、ダビデらは常に「ユダ」として区別されており、両者の関係は、強大な部族連合国家「イスラエル」が部族連合に参画しない「ユダ」を従属させるものであった。このような両国の関係は、前8世紀に北王国「イスラエル」が滅亡するまで続いたと考えられ、本書および「列王記」で描かれるダビデおよびソロモンの「イスラエル統一王国」も、史実とすれば両王が「ユダ」と「イスラエル」の王を兼務する「連合王国」体制であったものと推認される。ダビデの両王国における王即位の経緯を描くサム下2~5章、特に5:1~5を参照。日課箇所は、このダビデの両王国における王即位が神的計画によるものであることを示す意図で置かれている説話である。

・ダビデに油を注いで将来の王即位を約束した人物として描かれる「サムエル」は、本書冒頭で誕生物語から描かれると共に、「サウルの王国」形成に決定的

な役割を果たした人物として描かれている。おそらく、「サムエル」は元来、「サウル王伝承」とのみ結びついて伝えられていた「祭祀王」であり、「ダビデ」もこの同じ「サムエル」から「油注ぎ」を受けたと明示することによって、「サウル」の王権が「ダビデ」に継承されたと主張しようとしているのであろう。

・「油注ぎ」(塗油)は、神に遣わされた者として概念化された「油注がれた者(メシア)」思想の元になる宗教儀礼であるが、世界で広く知られ、また、王即位や祭司任命などに際する採用されていた儀式である。「メシア」思想は、旧約正典編纂完了以後、黙示的終末思想に取り込まれて、終末に来临する神的存在としての「メシア」のイメージで語られるようになり、新約正典にも少なからず影響を及ぼすことになったが、旧約正典中では、神的存在としてのイメージで「メシア」が取り上げられることは、ほとんどない。

使徒書日課(ローマ 6章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、自身のローマ訪問計画を伝え、また、その後のエスパニア伝道計画への協力を呼び掛けるために記した。パウロはこの書簡中で、ユダヤ人と異邦人が、異なる歴史背景ゆえに異なる仕方によってであるが、基本的に同じ神の救済計画の中で「一つの神の民」として形成されるという福音理解を、整理して述べている。パウロの論において、ユダヤ人と異邦人が一つの救済計画の中で一つの救済共同体に加えられることの明確かつ唯一のしるしとなるのが、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受け」(ロマ6:3)ることである。日課箇所では、この「洗礼」に関する言説が示されたのに続いて、「洗礼」によって救済共同体に加えられた者が、「罪」の問題とどのように向き合ふべきなのかを問い、また指針を示そうとしている。

・日課箇所でパウロは、洗礼によってキリストと結ばれ、キリストの死と復活の命にあずかるようにされた者のアイデンティティを、「罪の奴隷」から「義の奴隷」へと変えられた者として提示している。「奴隷(ドゥーロス)」は、「パウロ書簡」に限らず広く用いられている語で、「僕」と訳される場合もある。「ローマ書」では、日課箇所中16~20節に6例が集中して用いられているほかは、書簡冒頭句「キリスト・イエスの僕(ドゥーロス)」の用例のみ。パウロの人間観では、人は必ず何者かの「奴隷」であり、完全に「自由」で独立した者となることはできないと考えられている。そこで、不適切な何者かの「奴隷」状態に置かれている者がそこから脱し、自由になるうとするならば、別の何者かの「奴隷」になるしかない。パウロは、人を死に至らせる「罪の奴隷」状態から解放し、「神の奴隷」へと変え、命に至らせることを、キリストによってもたらされた福音として説く。このパウロの言説は、「自由意志と奴隷意志」の問題として議論されてきた論点とは異なり、「神の奴隷」とされた者が「神の子」としての自由を与えられると展開する。

福音書日課(マタイ3章より)

・日課箇所は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことを伝える説話伝承で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)がほぼ同じ内容で伝えている。三福音書とも、前段で洗礼者ヨハネの宣教活動に関する簡潔な紹介を展開し、その活動の中で主イエスが洗礼を受けられたとしている。他方で、この洗礼授与に関連して主イエスとヨハネのやり取りを伝えているのは、マタイ福音書のみである(マタイ 3:14~15)。マタイは、おそらく、この洗礼者ヨハネによる主イエスへの洗礼授与という歴史的事実に関連して、初期教会周辺で両者の関係性に関する疑念が呈されていたことに対して、一定の解答を与えようとしている、と考えられる。この疑念は、宗教集団等における「洗礼」に類する儀式が授与者と受領者の間に強固な師弟関係を生じさせる入信儀礼として位置づけられていたということから生じたと考えられている。

・「洗礼」(バプティスマ<バプティゾー)は、「洗い清め」(バプティスムス)とも同根の用語で、ユダヤ教における「清め」の手段を指して用いられることもある。この「清め」儀式は、原則として当事者自身がその執行者となるものとして認識されていたと考えられる。洗礼者ヨハネの「洗礼」は、このユダヤ教的な「清め」儀式を前提としながら、個人の内面的な「悔い改め」の自覚を促す手段として執り行われていた(11 節参照)。そこで、「マタイ福音書」は、洗礼者ヨハネの宣教手段も、まずこの「悔い改め」を促すことにあつたと明示し(3:1)、この点において主イエスが洗礼者ヨハネの宣教と洗礼(の一部)を完全に継承されていることを示そうとしている(4:17)。同じことが、日課箇所 14~15 節において洗礼者ヨハネが主イエスに洗礼を受けることが「正しいこと(ディカイオシュネー)」であるとされることにおいても示されている。他方で、洗礼者ヨハネは、ユダヤ教内において一種のセクティックな宗教集団を形成しており、彼が執行する洗礼は、事実上、ヨハネの弟子になることを意味していたとも推認される。日課箇所 14~15 節が、ヨハネの思いとどまらせようとした発言から始まるのは、ヨハネ自身によって主イエスとの師弟関係を否定させる意図によるものと推察されるであろう。

来週の誕生日 (1月12日~18日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-224「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をした J.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。
- ・21-68「愛するイエスよ」は、17-18 世紀ドイツの讃美歌作家として知られる牧師ベンヤミン・シュモルクが、

51「愛するイエスよ」(作詞=T・クラウスニッツァー)のパロディとして作詞した洗礼讃美歌。

- ・21-549「わたしたちを造られた神よ」は、金城教会信徒の棚橋峯子の作で、公募により採用。『讃美歌 21』ではこの歌詞に二つの曲を付しているが、549 番は、阿佐ヶ谷東教会信徒・岸一隆がキリスト教音楽講習会讃美歌創作クラスで作曲したもの。
- ・21-91「神の恵みゆたかに受け」は、20 世紀米国の音楽家 O.ウェステンドルフが作詞し、ウェールズ民謡曲と組み合わせて発表された。

21-224「われらの神、くすしき主よ」**Wunderbarer König**

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegiefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!
3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

21-68「愛するイエスよ」**Liebster Jesu**

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / deinem Worte nachzuleben; / dieses Kindlein kommt zu dir, / weil du den Befehl gegeben, / daß man sie zu hinführe, / denn das Himmelreich ist ihre.
2. Ja, es schallet allermeist / deises Wort in unsern Ohren: / "Wer durch Wasser und durch Geist / nicht zuvor ist neu geboren, / wird von dir nicht aufgenommen / und in Gottes Reich nicht kommen."
3. Darum eilen wir zu dir; / nimm das Pfand von unsern Armen, / tritt mit deinem Glanz herfür / und erzeuge dein Erbarmen, / daß es dein Kind hier auf Erden / und im Himmel möge werden.
4. Hirte, nimm dein Schäflein an; / Haupt, mach es zu deinem Gliede; / Himmelsweg, zeig ihm die Bahn; / Friedefürst, sie du sein Friede; / Weinstock, hilf, daß diese Rebe / auch im Glauben dich umgebe.
5. Nun wir legen an dein Herz, / was vom Herzen ist gegangen. / Führ die Seufzer himmelwärts / und erfülle das Verlangen; / ja den Namen, den wir geben, / schreib ins Lebensbuch zum Leben.

21-91「神の恵みゆたかに受け」**Sent forth by God's blessing**

1. Sent forth by God's blessing, our true faith confessing, the people of God from this dwelling take leave. The supper is ended. Oh, now be extended the fruits of this service in all who believe. The seed of Christ's teaching, receptive souls reaching, shall blossom in action for God and for all. Your grace shall incite us, your love shall unite us to work for your kingdom and answer your call.
2. With praise and thanksgiving to God ever-living, the tasks of our ev'ryday life we will face--our faith ever sharing, in love ever caring, embracing God's children, the whole human race. With your feast you feed us, with your light now lead us; unite us as one in this life that we share. Then may all the living with praise and thanksgiving give honor to Christ and his name that we bear